

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチセンター
主任研究員 小野顕弘



『成長企業の法則 世界トップ100社に見る21世紀型経営のセオリー』

●名和高司著 株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン 2,800円+税

日本の国内市場は、成熟化が進み、市場はいつもたくさんのものであふれています。その中から常に新しいヒット商品が生まれ続けているのですが、インターネットの普及などから消費者の選択の目も厳しくなっており、いい商品であっても必ずしも実績に結びつけるのは難しい時代となってきました。さらに、近年は、大震災などの未曾有の天災、リーマンショックやイスラム国のテロといった大事件など、想定を超える大きな環境変化が起こっており、大企業といえども、その地位を維持し続けることは難しくなっています。

そのような複雑な環境にあっては、誰でも成功する絶対的な成功方程式は成立しにくく、各社各様の対応が求められているといえます。そのような観点からは、企業の取組とその結果である実績との関係を分析していくことは、一つの有効な方法となります。

著者は、これまで多くの企業へのコンサルティングを実施する中で、次世代の企業成長モデルの研究を進めてきており、前著『「失われた20年の勝ち組企業」100社の成功法則～「X」経営の時代』では、1990年～2010年のいわゆる日本の失われた20年と呼ばれる時期に成長を実現した国内企業100社を分析し、企業の成長には事業モデルを構築する力（イノベーション）と市場を開拓していく力（マーケティング）が重要として「Xモデル」の提案を行っています。今回は市場のグローバル化が一層進んできている現状を踏まえ、2000年～2014年の15年間に世界的な成長を実現した企業100社を抽出し、その企業行動の分析を行って

います。

本書では前回の「Xモデル」の考え方を発展させ、「ビジネスモデル」、「コア・コンピタンス」、「企業DNA」、「志」の4つの視点において、独自の強さの強化と変化への対応という二律背反的取組を進めることが重要として、新たに「LEAP(跳躍)モデル」を提案しています。低価格と高品質、社内事業と他社との連携のあり方、自社の強みの強化と事業範囲の広がり、企業の目的と社会的価値との関係など、各社がそれぞれの経営環境の中で、いかにバランスを取りながら成長を実現しているのかというテーマについて、コンサルタントの視点から分析を進めています。

事例企業は、評価トップのアップルを筆頭に、グーグル、サムスン電子、スターバックス、P&Gなど、幅広い業界の世界的企業が取り上げられており、ファーストリテイリングなど日本企業の事例にも詳細な解説がなされています。これら企業が、停滞や危機的状况を乗り越え、いかに現在の成長を実現してきたのか、それが実現できた理由とは、そのような各社の戦略のエッセンスに触れられる、示唆に富んだ一冊として是非一読をお勧めします。

【著者略歴】

東京大学法学部卒業後、ハーバード・ビジネススクールにてMBA取得。三菱商事に勤務後、マッキンゼーのディレクターとして20年間コンサルティングに従事。現在、一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授、株式会社ジェネシスパートナーズ、ネクスト・スマート・リーン株式会社の代表取締役。